

はじめに

平成 25 年度に実施した全国学力学習状況調査の本市の結果によると、「学校に行くのは楽しいと思いますか」という質問に対し、「そう思う（どちらかといえばそう思うを含む）」と回答している小学校 6 年生が 81.6%、「そう思わない（どちらかといえばそう思わないを含む）」は 18.2% います。それに対し、中学校 3 年生はそれぞれ 79%、21% となり、「そう思わない」が若干増えています。

また、「国語の授業の内容はよく分かりますか」という質問に対し、「当てはまる（どちらかといえば当てはまる）」と回答している小学校 6 年生が 75%、「当てはまらない（どちらかといえば当てはまらない）」25%、中学校 3 年生はそれぞれ 68.5%、30.9% となり、「当てはまる」が若干減り、「当てはまらない」が 5% 増えています。さらに、「数学の授業の内容はよく分かりますか」という質問に対しては、「当てはまる（どちらかといえば当てはまる）」と回答している小学校 6 年生が 76.2%、「当てはまらない（どちらかといえば当てはまらない）」23.4%、中学校 3 年生はそれぞれ 73.5%、25.6% となり、「当てはまる」が若干減り、「当てはまらない」が若干増えています。つまり、調査結果から「学年が上がるごとに学校生活に対する満足度や、授業に対する理解度が低下するという傾向がある」ということが分かりました。

児童生徒が学校で過ごすほとんどの時間が「授業」であることを考えると、「学年が上がるにつれて授業の内容が分からなくなると、学校へ行くのが楽しくなくなる」という傾向はあるようです。この点は本市の児童生徒に限ったことではなく、全国、県の数字を比べてみても同様な結果が出ています。

児童生徒が「学級や学校が楽しくない」「居心地がよくない」と、落ち着いて集中して学習したり、学校生活を前向きに取り組んだりすることが難しくなります。そうすると、ますます授業の内容がわからなくなり、学校や学級での生活に意味を見出せなくなってしまうという“負の連鎖”が生まれます。（図 1）

つまり、学力を充実させるためには、「指導法や授業の改善」だけではなく、児童生徒の心の成長を促す学びの集団としての学級・学校づくりとして「学習環境」「人的環境」の改善が図られることで、児童生徒が「授業がわかるから集中できる」「仲間や教師と一緒に集中して学習できる」「学級や学校が楽しいから授業が楽しい」という“正の連鎖”を生み出すことが重要であると考えました。（図 2）

こうした“正の連鎖”と「児童生徒の学ぶ意欲（＝学ぼうとする力）」の関連性については、さまざまな研究（鹿毛 2007¹⁾、真田 2013²⁾）でも指摘されています。

以上のような現状を踏まえ、豊明市は、平成 26 年度に県から「学力充実プラン推進事業」の研究委嘱を受け、豊明市主任研究と共同して「豊明市学力充実プラン」の構築と実践を進めることにしました。

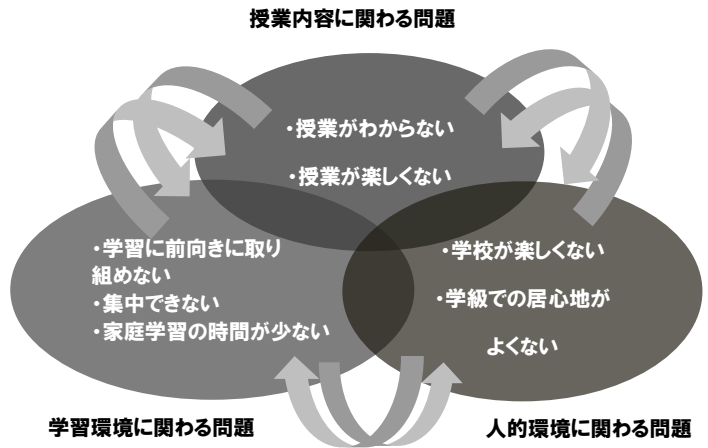


図 1 本市における学力に関わる問題

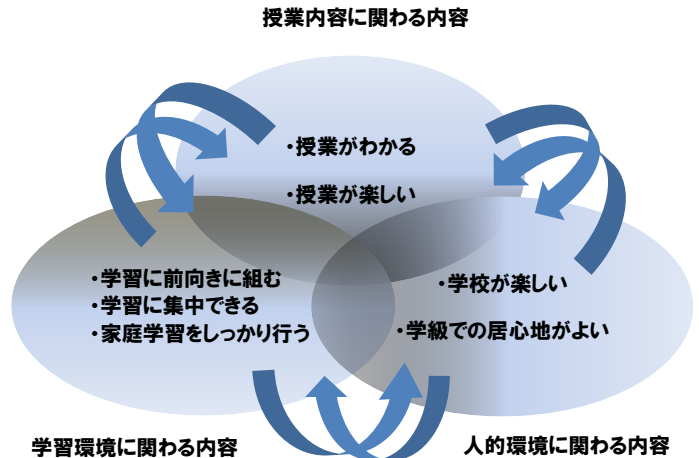


図 2 学力を充実するための“正の連鎖”

注記

- 1) 鹿毛雅浩『子どもの姿に学ぶ教師 「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」』教育出版、2007
- 2) 真田稷人、浅川潔司、佐々木聡、貴村亮太「児童の学習意欲の形成に関する学校心理学的研究—学習規律と学級適応感との関連について—」『兵庫教育大学教育実践学論集』第 15 号、pp.27-38,2014